

六反麻里代, 片岡竜貴, 小谷泰一, 南口早智子, 羽賀博典
(京都大学医学部附属病院 病理診断科)

【症例】20歳 女性

【既往歴・家族歴】特記事項なし

【現病歴】

2009年4月、検診の胸部X線写真にて右肺野に異常陰影を指摘され、他院で精査の結果、Positron Emission Tomography(PET)で右肺尖部(1.5 cm)と肝臓(5 cm)に異常集積を認めた。同年6月に右肺尖部切除術を施行したが、病理学的に梗塞巣しか認めず確定診断に至らなかった。同年8月に肝生検にて、EBER陽性T細胞の増殖が見られ、EBV-associated T/NK-cell lymphoproliferative disorder/ compatible with CAEBV(Chronic Active Epstein-Barr Virus infection)と診断された。

臨床症状に乏しく、診断の再考、治療方針の決定目的に当院血液内科を紹介受診。同年10月に肝生検を施行し、EBER陽性の小型リンパ球の増加を認めたものの確定診断には至らなかったが、T細胞受容体 γ 鎖遺伝子の再構成を認め(oligoclonal様の注釈あり)、暫定的にEBV陽性T細胞リンパ腫の診断となった。症状が非典型的であり経過観察を行っていたが、その後半年間で肝腫瘍の増大を認め、2010年4月、診断・治療目的に腹腔鏡補助下拡大肝右葉切除術を施行した。

【肉眼所見】

肝S8領域に7.0cm x 6.4cm x 5.6 cm大の境界明瞭、辺縁整の白色充実性腫瘍を認める。

【配布標本】

腫瘍代表部分(肝臓手術検体、HE染色)

【問題点】

確定診断、鑑別診断